

---

# 勇者と沼女

みーや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者と沼女

### 【Nコード】

N2748BA

### 【作者名】

みーや

### 【あらすじ】

魔物が住むと噂される沼と娘と勇者のお話

## 沼1（前書き）

短編を予定しております。よろしく願います。

## 沼1

ここは昼間でもフクロウの鳴き声が響き、日中でも、日の光がさす事のないうす暗くどんよりとした雰囲気をかもしだす森と、その森のちょうど中心部に位置する沼。

ここは、町の人が『魔物の出る沼』と恐れていて、めったな事では近づかない場所だ。

そりゃ、そうだ。

沼なんて、オドロオドロという雰囲気で、異様な空気を放っている。それに、この沼地に近づく前の、森全体もうつそうと茂っていてどんなに天気でも光が差す場所ではない。

太陽の光の侵略を、森全体で拒んでいる様に見える。

華やかな町の裏側に広がる広大な森は、闇の部分を隠し持っているようで人々から恐れられていた。

だけど、私は知っている。

生まれ育った町の裏手に広がるこの森。

町人の皆が恐れて近づく事のないこの森の沼が！。

絶好の釣り場ロケーションという事を。

「やったー！三匹めー！」

私は手作りの釣り竿を片手に、釣れたばかりの魚を手に取り一人ガツツポーズを決め込む。

ここの沼は、実は魚がよく釣れる。

色はカラフルで、水色やら桃色や蛍光黄色など、目には優しくないド派手な魚達だが、沼に住む魚にしては泥臭さがなく、味はなんとも美味なのだ。

一口食べたらずめられない！止まらない！まるでカルビー！（それ違う）

おまけに町の市場に持っていくとよく売れるのだ。

見た目はカラフルだけど、この味はやみつきになるらしく、高値で取引が出来る。

ただの趣味ではなく、趣味と実益を兼ねた生活の種なのだ。

釣って楽し！売ってもうけ！

まさに一石二鳥のマイホビー。なんと、充実した趣味であり仕事！十八歳の年頃の少女の趣味が釣りというのは渋いと我ながら自覚している。

だけど、町の女友達の間で流行っているのはレース編みとか、刺繍とか。細かい作業が苦手な私には、本当に無理。

レース編みよりむしろ、ゴザでも編んでる方が性にあってる。

そんな私は、共通の趣味を持つ友人がいないので、いつものように一人で釣りにきていた。

まあ、友達にもこの沼に来ている事は秘密だけど。

友達は何、町から南西方向に流れる川で釣りをしていると信じてる。

なぜか、この沼は昔から町の住民に、恐れられていた。  
まあ、場所が場所だけにしょうがない。

だけど、私は小さい頃からよくここに遊びに来ていた。  
こっそりと、一人探検のつもりで、よく来ていたものよ。  
だから、怖いとか魔物が出そうとか言われてもいまいちピンとこない。

実際、魔物の姿なんて見た事ないし。

あるのは、おどろおどろした沼。

小さい頃から慣れ親しんでいるこの沼なので、この異様な雰囲気も、私には心の落ち着く空間となっている。

暗く、どんよりした空気も、何とも言えずに心地のいい空間なのだ。

朝から、地面を掘り起こしてつかまえてきた餌のミミズをセツトして、はりきって竿を振る。

今日も大漁、うっしっし。

自分の釣りレベルに満足しながら、釣った魚をまずは家へと持ち帰る道中、町はいつもより人と活気に溢れていた。

何だ？この人ばかり。

いつもより人の数が多いので、すれ違いながら歩くのに苦労する。  
不思議に思っていると、はしゃいだ様子の町娘達とすれ違う。

「早く、早く！もうすぐ来ちゃうわ」

「ひと目でもいいから見なきゃ！勇者さまを！」

どうやら、勇者ご一行様が来るらしい。

簡単に説明すると勇者というのはこの世界に何人が存在する。

誰でも簡単になれる訳ではなく、王宮にて勇者と認められなければ勇者を名乗る事は出来ない。

王宮で、勇者検定でも受けるのか？特に興味もないのであまり詳しくない私だ。

そして認められた勇者は自分でパーティを組んで魔物と戦い世界平和の為に頑張っているらしい。

そして、その勇者の中でもランクがある。

例えて言うなら、

Sランク 立派な勇者

Aランク そこそこ勇者

Bランク 普通の勇者

Cランク 初心者な勇者

Dランク 自称勇者

…と私的例えで大変申し訳ないが、ランクがあるという訳よ。詳しいランク付けは私にはよくわからないが、Dランクが一番多いと聞く。…って、勇者なのか、それ！

もっとも、勇者認定されるだけで、素晴らしい事だと私は思うけど、世の中には、更に上をいくSSランクというお方も存在するそうなのーお。

町の入り口へと駆け寄っていく人達を横目に見ながら人の波を逆走

し、家に向かう。

一見みたい？

ないない、そんな気持ち。それより、釣った魚を早くさばかなきゃ

！釣り魚は鮮度が命よ。

そんな気持ちで私は自分の家へと急いでいく。



## 沼2

今日も元気に釣り三昧

私は上機嫌に自作の鼻歌を歌いながら、釣りざお片手に沼へと急ぐ。昨日は、町全体が、勇者歓迎ムードでお祭りムードだったのだ。

そのせいなのか、町全体にいつもより活気があり、私の釣った魚もよく売れた。まさに、勇者さまさまだわ。

噂に聞けば、まだ勇者さまご一行は、滞在するらしいし、さあ今日も釣って、張り切って売りに行くわ！

今のうちよ、稼ぎ時！

私ははりきって釣りざお片手に深い森の奥の沼を目指して進んでいく。

その時、鼻歌を歌いながら進んでいたら、いきなり周囲が閃光のごとく輝き、森全体を包んだ！。

それと同時にもの凄い爆発音が森中に響き渡り、私は驚きのあまり尻もちをついた。

何！？何がおこったの？

木々にとまって休んでいた鳥たちは、いつせいに飛び去り、ただならぬ雰囲気醸し出している。

この様子では、絶対どこかが大爆発したと思う。  
でも、どこが？

正直怖い。けど、確かめなきゃ…！

私は、震える足を何とか奮い立たせて爆発音の聞こえた方向、いつもの沼の方へと足を向けて急いだ。

知らずに急ぎ足になっていたせいか、私の息は上がっていた。  
心臓は、早鐘を打つけれども、確かめなきゃ帰れない。

私は森の木々の間を抜けて、目的地へとたどり着いた。  
ついてそうそう、違和感を感じる。

そこにいたのは見目麗しいパーティ御一行様。

なっ…なんで？なんで人がここにいます？

私が疑問に思い、目を見開いていると、どうやらその見目麗しい一行様は、私に気付いたらしい。

私の疑問をよそに、そのパーティで一番見目麗しい男の人が近づいてきて、

「どうしました？道に迷いましたか？ここの沼地は危険だから近づかないほうがいい」

いやいやいや、危険なのはむしろあんだ達だよ？

ここは魔物が住むと言われている森の奥地の沼だよ？

人々はめったに近寄らない、絶好釣り場…いやいや、危険な場所だよ？

見目麗しい人物が近付いて来て、私に話しかける様子を、じっと見つめていたその時、私は気付いたのだ。

その近付いて来た人物の背後に存在するはずの、

いつもの沼が…私の釣り場ロケーションが…憩いの場の沼が…

ない。

そりゃあ、もう爆発が起きて沼が吹っ飛んだ後の残骸かのようにデカイ穴だけ空いていて、煙もプスプスと数か所上がっていた。

私は茫然と沼があつた場所を見つめる。

私が先程感じた違和感の正体は、ここか！

「ぬ…ぬ…ぬ…沼が…」

私は震える指先で、沼のあつたであろう場所にあいてるデカイ穴を指さして必死に言葉にする。

見目麗しい男の人は、神妙な顔つきで頷くと、

「この沼は魔物が集まる危険な場所だという事で、町長から依頼をうけてね。沼を消滅させたんだ」

「ど……」

咄嗟に言葉が出ない私に、更に追い打ちをかける。

「でも、もう心配ない。沼は完全に消滅したから」

安心させるかのように、優しく言ってくれた見目麗しい男の人の輝くばかりの笑顔を見た瞬間、

「どうしてくれるのよー！私の釣り場がー！趣味の憩いの場が

「――！私の飯のタネ――！」

私は掴みかかる勢いで、そのまま、まくしたて責め立てた。

「つまりお嬢ちゃんは、ここの沼によく来ていたと？」

私は頷きながら、パーティの一人である、事情を聞いてきた黒口ブの魔術師風の男の人に涙ながらに語った。

「そうよ！一回も魔物なんて会った事ないし、町長がそんな事言うのも何かの勘違いよ！」

私の勢いに圧倒されたのか、彼らは黙って私の様子を観察している。

「だけどなあ、お嬢ちゃん？」

ポリポリと頬をかきながら魔術師風の男は、

「実際俺達も、目撃証言があるから依頼された訳で……」

説明を始めた親切な魔術師風なお兄さんを遮り、

ずいっと前に出てきたのは、さっきの見目麗しい男の人だった。

金髪に緑の瞳をしているその男の人の動きは、どこか上品で、私に優しく諭すように話しかける。

「町長から頼まれたのです。この沼には、それは恐ろしい沼女が出ると」

「沼女？」

「はい、沼女です」

「……そんなの見かけた事ないわ」

生まれた時から慣れ親しんで通い慣れたこの沼で、見かけた事など一度もない。

「町長の話では、雨を好んでよく現れるそうです。先日雨の日に迷い込んだ旅人が沼の周囲で踊り狂う赤い沼女を見たそうです」

「え？赤い…女…？」

「はい。つい一週間前にも全身赤で、一心不乱に踊り狂い、まるで魔物に魂を捧げるかのような踊りが目撃されているそうです」

…一週間前。

私は、ある事を思いだしていた。

そう、あれは、一週間前の小雨のばらつく天気。

家に閉じこもっているのに耐えきれなくなった私は、沼まで釣りに来ていた。

そうしたら、思った以上に大漁祭りで、一人興奮してはしゃいでいた。

長年愛用の……赤い…カップを着て…。

「上体を後ろへ大きくそらし踊り狂うその姿は、本当に恐ろしい魔

物の姿だったと…」

あまりの大漁ぶりに狂喜乱舞し、『大漁の踊り』と、勝手に命名し、木と木の間に釣り竿をかけて、その釣り竿に向かって必死にリンボーダンスをしていたあの踊りの事かしら…。

赤いカッパきて、一心不乱にリンボーダンスをしていた姿の私の事を言っているのかしら…。  
その沼女というのは…。

「それに、普段から町人達も気味悪がって近付かないというので、この機会に排除しました」

おいおいあつさり、排除しましたとか言ってくれるけど、いきなり奪われた私はどうすればいいの？

あまりのショックに、地面に座りこんだ私を困ったように取り囲むパーティ。

地面に座りこんで、おいおい泣く私に、困った顔をして、跪いて、私の顔を覗きこんできたのは、先程の見目麗しい金髪の男の人。そうして、

「すみません。あなたをそんなに悲しませる事になろうとは思いませんでした。

町人から見て気味の悪い沼地でも、あなたから見て、大切な思い出の場所だったのでしょう。その場所を私は、壊滅させてしまいました」

やっぱり、壊滅させたのは、あなたね…！  
あなたセンターね！

「ルーフアスⅡグラン、あなたに出来る限りの謝罪をします。ー勇者の名においてー」

勇者？何それ？しかも、ルーフアスⅡグラン？

私はどこかで聞いた覚えのある今の言葉を頭の中で必死に反芻する。  
ルーフアスⅡグラン…

グラン…？

グラン…！？

ようやく私の頭の中のパズルが、はまった時、私は叫びそうになった。

グランとは、隣国の名前だ。

グラン王国の、確か第三王子が、勇者と呼ばれる存在になっていると…

その能力は勇者の中でもSSランクで、その実力は抜きん出ていると…。

私は町の噂話を思い出していた。

暗い森の中でも、光の加護があるかのように輝く金の髪。

木々の新緑の色を表現するかのようなグリーンに、少し青みがかつた瞳。

背も高く、体つきは逞しく、余分な肉などいっさいついていない均整のとれた体。

王子でありながらも、人々の平和の為、勇者と言う職業についた慈悲深いその存在。

町では、『勇者ブロマイド』『売上ナンバーワン！  
毎年の『抱きしめられたい勇者』ナンバーワン！

だけど、今の私には

関係ない！！

「バカ　！私の今後の生活を保障しろ！どうしてくれるの！バカ　！おたんこなすのお前のかあちゃんデ・ベ・ソー！」

私は、きつい眼差しで、目の前の人物をにらみながらも叫んだ。  
我ながら幼稚くさい言葉だと思いながら。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2748ba/>

---

勇者と沼女

2012年1月8日21時48分発行